一房の葡萄

有島武郎

一

僕は小さい時に絵を描(か)くことが好きでした。僕の通(かよ)っていた学校は横浜(よこはま)の山の手(やまのて)という所にありましたが、そこいらは西洋人ばかり住んでいる町で、僕の学校も教師は西洋人ばかりでした。そしてその学校の行きかえりにはいつでもホテルや西洋人の会社などがならんでいる海岸の通りを通るのでした。通りの海添いに立って見ると、真青(まっさお)な海の上に軍艦だの商船だのが一ぱいならんでいて、煙突から煙の出ているのや、檣(ほばしら)から檣へ万国旗をかけわたしたのがあって、眼

がいたいように綺麗でした。僕はよく岸に立ってその景色を見渡して、家に帰ると、覚えているだけを出来るだけ美しく絵に描いて見ようとしました。けれどもあの透きとおるような海の藍色と、白い帆前船などの水際近くに塗ってある洋紅色とは、僕の持っている絵具ではどうしてもうまく出せませんでした。いくら描いても描いても本当の景色で見るような色には描けませんでした。

ふと僕は学校の友達の持っている西洋絵具を思い出しました。その友達は矢張西洋人で、しかも僕より二つ位齢が上でしたから、身長は見上げるように大きい

子でした。ジムというその子の持っている絵具は舶来の上等のもので、軽い木の箱の中に、十二種（いろ）の絵具が小さな墨のように四角な形にかためられて、二列にならんでいました。どの色も美しかったが、とりわけて藍と洋紅とは喫驚（びっくり）するほど美しいものでした。ジムは僕より身長（せい）が高いくせに、絵はずっと下手（へた）でした。それでもその絵具をぬると、下手な絵さえがなんだか見ちがえるように美しく見えるのです。僕はいつでもそれを羨（うらやま）しいと思っていました。あんな絵具さえあれば僕だって海の景色を本当に海に見えるように描（か）いて見せるのになあと、自分の悪い絵具を恨みながら考え

ました。そうしたら、その日からジムの絵具がほしくってほしくってたまらなくなりました。けれども僕はなんだか臆病になってパパにもママにも買って下さいと願う気になれないので、毎日々々その絵具のことを心の中で思いつづけるばかりで幾日か日がたちました。

今ではいつの頃だったか覚えてはいませんが秋だったのでしょう。葡萄の実が熟していたのですから。天気は冬が来る前の秋によくあるように空の奥の奥まで見すかされそうに霽れわたった日でした。僕達は先生と一緒に弁当をたべましたが、その楽しみな弁当の最

中でも僕の心はなんだか落着かないで、その日の空とはうらはらに暗かったのです。僕は自分一人で考えこんでいました。誰（たれ）かが気がついて見たら、顔も屹度（きっと）青かったかも知れません。僕はジムの絵具がほしくってほしくってたまらなくなってしまったのです。胸が痛むほどほしくなってしまったのです。ジムは僕の胸の中で考えていることを知っているにちがいないと思って、そっとその顔を見ると、ジムはなんにも知らないように、面白そうに笑ったりして、わきに坐（すわ）っている生徒と話（はなし）をしているのです。でもその笑っているのが僕のことを知っていて笑っているようにも思えるし、

何か話をしているのが、「いまに見ろ、あの日本人が僕の絵具を取るにちがいないから。」といっているようにも思えるのです。僕はいやな気持ちになりました。けれどもジムが僕を疑っているように見えれば見えるほど、僕はその絵具がほしくてならなくなるのです。

二

僕はかわいい顔はしていたかも知れないが体（からだ）も心も弱い子でした。その上臆病者（おくびょうもの）で、言いたいことも言わずにすますような質（たち）でした。だからあんまり人か

らは、かわいがられなかったし、友達もない方でした。昼御飯がすむと他（ほか）の子供達は活潑（かっぱつ）に運動場（うんどうば）に出て走りまわって遊びはじめましたが、僕だけはなおさらその日は変に心が沈んで、一人だけ教場（きょうじょう）に這入（はい）っていました。そとが明るいだけに教場の中は暗くなって僕の心の中のようでした。自分の席に坐（すわ）っていながら僕の眼は時々ジムの卓（テイブル）の方に走りました。ナイフで色々ないたずら書きが彫りつけてあって、手垢（てあか）で真黒（まっくろ）になっているあの蓋（ふた）を揚（あ）げると、その中に本や雑記帳や石板（せきばん）と一緒になって、飴（あめ）のような木の色の絵具箱があるんだ。そしてその箱の中には小さい墨のような形を

した藍や洋紅の絵具が……僕は顔が赤くなったような気がして、思わずそっぽを向いてしまうのです。けれどもすぐ又（また）横眼でジムの卓（テイブル）の方を見ないではいられませんでした。胸のところがどきどきとして苦しい程（ほど）でした。じっと坐っていながら夢で鬼にでも追いかけられた時のように気ばかりせかせかしていました。

教場に這入（はい）る鐘がかんかんと鳴りました。僕は思わずぎょっとして立上りました。生徒達が大きな声で笑ったり呶鳴（どな）ったりしながら、洗面所の方に手を洗いに出かけて行くのが窓から見えました。僕は急に頭の中が氷のように冷たくなるのを気味悪く思いながら、

ふらふらとジムの卓(テイブル)の所に行って、半分夢のようにそこの蓋を揚げて見ました。そこには僕が考えていたとおり雑記帳や鉛筆箱とまじって見覚えのある絵具箱がしまってありました。なんのためだか知らないが僕はあっちこちを見廻(みまわ)してから、誰も見ていないなと思うと、手早くその箱の蓋を開けて藍と洋紅との二色(ふたいろ)を取上げるが早いかポッケットの中に押込みました。そして急いでいつも整列して先生を待っている所に走って行きました。

　僕達は若い女の先生に連れられて教場に這入り銘々の席に坐りました。僕はジムがどんな顔をしているか

見たくってたまらなかったけれども、どうしてもそっちの方をふり向くことができませんでした。でも僕のしたことを誰も気のついた様子がないので、気味が悪いような、安心したような心持ちでいました。僕の大好きな若い女の先生の仰(おっしゃ)ることなんかは耳に這入りは這入ってもなんのことだかちっともわかりませんでした。先生も時々不思議そうに僕の方を見ているようでした。

僕は然(しか)し先生の眼を見るのがその日に限ってなんだかいやでした。そんな風で一時間がたちました。なんだかみんな耳こすりでもしているようだと思いながら

一時間がたちました。

教場を出る鐘が鳴ったので僕はほっと安心して溜息(ためいき)をつきました。けれども先生が行ってしまうと、僕は僕の級(きゅう)で一番大きな、そしてよく出来る生徒に「ちょっとこっちにお出(い)で」と肱(ひじ)の所を掴(つか)まれていました。僕の胸は宿題をなまけたのに先生に名を指(さ)された時のように、思わずどきんと震えはじめました。けれども僕は出来るだけ知らない振りをしていなければならないと思って、わざと平気な顔をしたつもりで、仕方なしに運動場(うんどうば)の隅(すみ)に連れて行かれました。

「君はジムの絵具を持っているだろう。ここに出し給(たま)

え。」

　そういってその生徒は僕の前に大きく拡(ひろ)げた手をつき出しました。そういわれると僕はかえって心が落着いて、

「そんなもの、僕持ってやしない。」と、ついでたらめをいってしまいました。そうすると三四人の友達と一緒に僕の側(そば)に来ていたジムが、

「僕は昼休みの前にちゃんと絵具箱を調べておいたんだよ。一つも失(な)くなってはいなかったんだよ。そして昼休みが済んだら二つ失くなっていたんだよ。そして休みの時間に教場にいたのは君だけじゃないか。」と

少し言葉を震わしながら言いかえしました。

僕はもう駄目(だめ)だと思うと急に頭の中に血が流れこんで来て顔が真赤(まっか)になったようでした。すると誰だったかそこに立っていた一人がいきなり僕のポケットに手をさし込もうとしました。僕は一生懸命にそうはさせまいとしましたけれども、多勢(たぜい)に無勢(ぶぜい)で迚(とて)も叶(かな)いません。僕のポッケットの中からは、見る見るマーブル球(だま)（今のビー球(だま)のことです）や鉛のメンコなどと一緒に二つの絵具のかたまりが掴み出されてしまいました。「それ見ろ」といわんばかりの顔をして子供達は憎らしそうに僕の顔を睨(にら)みつけました。僕の体(からだ)はひとり

でぶるぶる震えて、眼の前が真暗（まっくら）になるようでした。いいお天気なのに、みんな休時間を面白そうに遊び廻っているのに、僕だけは本当に心からしおれてしまいました。あんなことをなぜしてしまったんだろう。取りかえしのつかないことになってしまった。もう僕は駄目だ。そんなに思うと弱虫だった僕は淋（さび）しく悲しくなって来て、しくしくと泣き出してしまいました。

「泣いておどかしたって駄目だよ」とよく出来る大きな子が馬鹿にするような憎みきったような声で言って、動くまいとする僕をみんなで寄ってたかって二階に引張って行こうとしました。僕は出来るだけ行くまいと

したけれどもとうとう力まかせに引きずられて階子段(はしごだん)を登らせられてしまいました。そこに僕の好きな受持ちの先生の部屋(へや)があるのです。

　やがてその部屋の戸をジムがノックしました。ノックするとは這入(はい)ってもいいかと戸をたたくことなのです。中からはやさしく「お這入(はい)り」という先生の声が聞こえました。僕はその部屋に這入る時ほどいやだと思ったことはまたとありません。

　何か書きものをしていた先生はどやどやと這入って来た僕達を見ると、少し驚いたようでした。が、女の癖に男のように頸(くび)の所でぶつりと切った髪の毛を右の

手で撫(な)であげながら、いつものとおりのやさしい顔をこちらに向けて、一寸(ちょっと)首をかしげただけで何の御用という風をしなさいました。そうするとよく出来る大きな子が前に出て、僕がジムの絵具を取ったことを委(くわ)しく先生に言いつけました。先生は少し曇った顔付きをして真面目(まじめ)にみんなの顔や、半分泣きかかっている僕の顔を見くらべていなさいましたが、僕に「それは本当ですか。」と聞かれました。本当なんだけれども、僕がそんないやな奴(やつ)だということをどうしても僕の好きな先生に知られるのがつらかったのです。だから僕は答える代りに本当に泣き出してしまいました。

先生は暫く僕を見つめていましたが、やがて生徒達に向って静かに「もういってもようございます。」といって、みんなをかえしてしまわれました。生徒達は少し物足らなそうにどやどやと下に降りていってしまいました。

先生は少しの間なんとも言わずに、僕の方も向かずに自分の手の爪を見つめていましたが、やがて静かに立って来て、僕の肩の所を抱きすくめるようにして「絵具はもう返しましたか。」と小さな声で仰いました。僕は返したことをしっかり先生に知ってもらいたいので深々と頷いて見せました。

「あなたは自分のしたことをいやなことだったと思っていますか。」

もう一度そう先生が静かに仰った時には、僕はもうたまりませんでした。ぶるぶると震えてしかたがない唇（くちびる）を、嚙（か）みしめても嚙みしめても泣声が出て、眼からは涙がむやみに流れて来るのです。もう先生に抱かれたまま死んでしまいたいような心持ちになってしまいました。

「あなたはもう泣くんじゃない。よく解（わか）ったらそれでいいから泣くのをやめましょう、ね。次ぎの時間には教場に出ないでもよろしいから、私（わたくし）のこのお部屋に

入らっしゃい。静かにしてここに入らっしゃい。私が教場から帰るまでここに入らっしゃいよ。いい。」と仰りながら僕を長椅子に坐らせて、その時また勉強の鐘がなったので、机の上の書物を取り上げて、僕の方を見ていられましたが、二階の窓まで高く這い上った葡萄蔓から、一房の西洋葡萄をもぎって、しくしくと泣きつづけていた僕の膝の上にそれをおいて静かに部屋を出て行きなさいました。

三

一時（いちじ）がやがやとやかましかった生徒達はみんな教場（きょうじょう）に這入（はい）って、急にしんとするほどあたりが静かになりました。僕は淋（さび）しくって淋しくってしようがない程（ほど）悲しくなりました。あの位好きな先生を苦しめたかと思うと僕は本当に悪いことをしてしまったと思いました。葡萄（ぶどう）などは迚（とて）も喰（た）べる気になれないでいつまでも泣いていました。

ふと僕は肩を軽くゆすぶられて眼をさましました。僕は先生の部屋（へや）でいつの間にか泣寝入りをしていたと見えます。少し痩（や）せて身長（せい）の高い先生は笑顔（えがお）を見せて僕を見おろしていられました。僕は眠ったために気分

がよくなって今まであったことは忘れてしまって、少し恥しそうに笑いかえしながら、慌（あわ）てて膝の上から辷（すべ）り落ちそうになっていた葡萄の房をつまみ上げましたが、すぐ悲しいことを思い出して笑いも何も引込んでしまいました。

「そんなに悲しい顔をしないでもよろしい。もうみんなは帰ってしまいましたから、あなたはお帰りなさい。そして明日（あす）はどんなことがあっても学校に来なければいけませんよ。あなたの顔を見ないと私（わたくし）は悲しく思いますよ。屹度（きっと）ですよ。」

　そういって先生は僕のカバンの中にそっと葡萄の房

を入れて下さいました。僕はいつものように海岸通りを、海を眺めたり船を眺めたりしながらつまらなく家に帰りました。そして葡萄をおいしく喰べてしまいました。

　けれども次の日が来ると僕は中々学校に行く気にはなれませんでした。お腹が痛くなればいいと思ったり、頭痛がすればいいと思ったりしたけれども、その日に限って虫歯一本痛みもしないのです。仕方なしにいやいやながら家は出ましたが、ぶらぶらと考えながら歩きました。どうしても学校の門を這入ることは出来ないように思われたのです。けれども先生の別れの時の

言葉を思い出すと、僕は先生の顔だけはなんといっても見たくてしかたがありませんでした。僕が行かなかったら先生は屹度悲しく思われるに違いない。もう一度先生のやさしい眼で見られたい。ただその一事（ひとこと）があるばかりで僕は学校の門をくぐりました。

そうしたらどうでしょう、先（ま）ず第一に待ち切っていたようにジムが飛んで来て、僕の手を握ってくれました。そして昨日（きのう）のことなんか忘れてしまったように、親切に僕の手をひいてどぎまぎしている僕を先生の部屋に連れて行くのです。僕はなんだか訳がわかりませんでした。学校に行ったらみんなが遠くの方から僕を

見て「見ろ泥棒の譃(うそ)つきの日本人が来た」とでも悪口をいうだろうと思っていたのにこんな風にされると気味が悪い程(ほど)でした。

二人の足音を聞きつけてか、先生はジムがノックしない前に、戸を開けて下さいました。二人は部屋の中に這入りました。

「ジム、あなたはいい子、よく私(わたくし)の言ったことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたからあやまって貰(もら)わなくってもいいと言っています。二人は今からいいお友達になればそれでいいんです。二人とも上手(じょうず)に握手をなさい。」と先生はにこにこしながら僕達を

向い合せました。僕はでもあんまり勝手過ぎるようでもじもじしていますと、ジムはいそいそとぶら下げている僕の手を引張り出して堅く握ってくれました。僕はもうなんといってこの嬉しさを表せばいいのか分らないで、唯恥しく笑う外ありませんでした。ジムも気持よさそうに、笑顔をしていました。先生はにこにこしながら僕に、

「昨日の葡萄はおいしかったの。」と問われました。僕は顔を真赤にして「ええ」と白状するより仕方がありませんでした。

「そんなら又あげましょうね。」

そういって、先生は真白（まっしろ）なリンネルの着物につつまれた体（からだ）を窓からのび出させて、葡萄の一房をもぎ取って、真白（まっしろ）い左の手の上に粉のふいた紫色の房を乗せて、細長い銀色の鋏（はさみ）で真中（まんなか）からぷつりと二つに切って、ジムと僕とに下さいました。真白い手（て）の平（ひら）に紫色の葡萄の粒が重って乗っていたその美しさを僕は今でもはっきりと思い出すことが出来ます。

僕はその時から前より少しいい子になり、少しはにかみ屋でなくなったようです。

それにしても僕の大好きなあのいい先生はどこに行かれたでしょう。もう二度とは遇（あ）えないと知りながら、

僕は今でもあの先生がいたらなあと思います。秋になるといつでも葡萄の房は紫色に色づいて美しく粉をふきますけれども、それを受けた大理石のような白い美しい手はどこにも見つかりません。

底本：「赤い鳥傑作集」新潮文庫、新潮社
1955（昭和30）年6月25日発行
1974（昭和49）年9月10日29刷改版
1984（昭和59）年10月10日44刷
初出：「赤い鳥」
1920（大正9）年8月号
入力：鈴木厚司
1999年2月13日公開
2005年11月20日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。